
焼肉の王子様再び

鷲原シュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焼肉の王子様再び

【Nコード】

N7200N

【作者名】

鷲原シュン

【あらすじ】

あの戦い再び

学校対抗焼肉大食い対決が再び行われた
今回は安い食べ放題なので予算の心配もなし
果たして勝利はだれの手に

選手紹介（ 台詞多め）（前書き）

はい、今回は人物紹介ということではほとんどが台詞
しかも紹介分が一部使い回し

選手紹介（台詞多め）

「というわけで、第二回！学校対抗焼肉大食い対決、エー実況はわたくし菊丸英二と」

「忍足祐士でお送り……………ってなんでやねん、しかもこれ、始まり方前にやった時と一緒にやん」

跡部の提案で（本人いわく決着をつけるぜ）ということで安い食べ放題の店にて行われた第二回焼肉大食い大会

「でも今日は参加メンバーが違っよ、比嘉中と六角中が居ない代わりに不動峰と立海大が居るし」

「よく立海の連中来る気になったな」

「三年が引退して試合もないから退屈なんだって、因みに四天宝寺はたまたま聖ルドルフと試合するために来てたんだって」

「結果どうやったんや？」

「雄太と柳沢いがいは6 - 0で敗退、柳沢が石田兄に伸されて途中棄権」

「で、不二弟はどうやったん？」

「財前とシングルスで試合して6 - 4で敗退、いいとこまで行ったんだけど」

「つか、なんでお前そんなこと知っとなねん、つか前置き長いわ」

「でわでわ各校6名ずつの大食い自慢はこいつらだ」

「おい菊丸、無視か、無視なんか」

「まずは青学、大食いといえば桃城武」

「今度は負けねえな、負けねえよ」

「生意気なスーパールーキー、越前リョーマ」

「どもっす」

「ご存知焼肉奉行大石秀一郎」

「肉汁命！」

「もうお前肉汁とダブルス組めよ（ボソッ）続いて、乾貞治」
「ふっ」

「そして天才不二周助、大丈夫か？」

「ねえ英二、紹介がほとんど第一回と同じなのは気のせい？」

「気のせい気のせい、そして最後は手塚国光部長」

「みんな、ここは「以上六名豪華布陣だ」菊丸、お前帰ったらグラ
ンド10週な」

「げえ、続いては立海大だ、ペテン師仁王雅治は何をしにかけてくる」
「プリっ、てか、どこその眼鏡と一緒にすんな、俺は妨害なんかし
よらん」

「風林火陰山雷真田弦一郎」

「なんであるうとやる以上は勝っ」

「赤目の悪魔^{デビル}切原赤也」

「あんたら全員、潰すよ！」

「達人柳連二」

「ふ」

「甘党けど大丈夫か？丸井ブン太」

「問題ないぜ」

「そして満を持して！神の子幸村精市の登場だ！」

「今回は楽しんでいくよ」

「三校目は熱血不動峰中や、まずは唯一の三年生、橘桔平」

「負けねばいい！」

「無駄に熊本弁かい、スピードのエース、実は副部長の神尾アキラ」
「リズムに乗るぜ！てか、実はは余計っす」

「ほーか、ボヤキウザいわあ、伊武深司」

「なんでこんな面倒な事やらなくちゃいけないんだろっ、でも橘さ
んやる気だしなあ、てか神尾リズムは飯に関係ないじゃん」

「うざいからばやくな、元祖波動球、兄貴に負けんとがんばりや、

石田鉄

「はは、でも兄貴三年だしもうあまり対決の機会ないと思いますよ」

「そゆこといわんでええの、自分選手やないやろ、部長の妹橘杏」

「まあよかと、むさい対決に花を添えるってことで頼むばい」

「むさくて悪かったな、つか自分まで熊本弁か、何かわいく見せようとしとんねん、自分のこと覚えてるやつおるんか？前衛キラー内村京介」

「どうせ覚えてもらえないぜ、俺なんて」

「あ、気にしとったんか」

「続いて大阪四天王寺、基本に忠実、実は必殺技持ちや、部長の白石蔵之助」

「あーん、エクスタシー」

「小春に振られて失恋中、物まね王子一氏ユウジ」

「……………」

「波動球は108式、食べるのは右利きやで、石田銀」

「……………」

「才気煥発、ご存知無我マニア、千歳千里」

「面白か勝負ばい、でも説明の使い回しは良かんとよ」

「悪かったな、飯も早食いや、難波のスピードスター忍足健也、そういえば自分何気に影薄ないか？」

「余計な御世話や」

「難波のごんたくれルーキー遠山金太郎」

「また越前^{こしまえ}と勝負できるで」

「最後は我らが氷帝や、部長の跡部景吾、そういえばもうツラとちやうねんな」

「つたりめーだ」

「今ちよつとずれへんかった？まあええわ、ムーンサルトの向日葵人」

「おい雄士、今手抜かなかったか？」

「気のせいや、努力と根性で頼むで、穴戸亮」

「負けたら激ださだぜ」

「時期部長、でもいまいちパツとせえへんわ、日吉若」

「ケンカ売ってんすか？」

「別に売ってへんで、てか寝るな、ボレーの天才芥川滋郎、誰かあとで起こしたりや」

「zzzzzzzzzz-」

「もうほつとくわ、そして樺地崇弘、こいつまだ坊主なん？」
「うす」

選手紹介（ 台詞多め）（後書き）

というわけで次回から始まります
キャラ崩壊ありなので気をつけてくださいね

本編（前書き）

というわけで本編です、ではどうぞ

本編

「ルールは簡単や、制限時間一時間以内で一番多く食べたモンの勝ち、ちなみに今回は通常の牛肉で統一したから」

忍足がマイクを持ちながら補足する

「そしてもちろん、最初に1杯、そして10皿ごとに1杯、乾の特性ドリンクを飲んでもらうから、というわけで滝君お願い」

滝がストップウォッチを押すとともに乾特性野菜汁が全員に配られる
「というわけで最初は乾特性野菜汁だ」

「ぱあ、やっぱりおいしいね」

まずは不二が飲み干す

「お、じゃあ俺がリズムよく飲みほして……………」

「下らん、こんなもの俺が軽くのみほしてくれろ」

神尾がジョッキに手をかけようとしたとき真田が威勢よく飲んだ
すると

「雷いい！」

と叫んで外へと駆けていき

「ぐはあ」

車止めにつまずいて気絶した

立海大

真田弦一郎

脱落

「……………深司のめよ」

「やだね」

「じゃあ……………石田！お前結構健康に気を使うタイプだろ」

「遠慮します」

「えつと……森！じゃなかった内村！お前ここで活躍したらかったこいぞ」

「いいつすよ、どうせ俺なんて」

神尾が他のメンバーに押し付けようと必死になってる

「まあまあ神尾、どれ、俺がのんで見るか」

と、橘（兄）が神尾からジョッキを受け取り飲み干すと

「あばれ球ああ」

と、ポーズだけ取って外にかけてった

「……橘さあああん！」「……」

不動峰中

橘桔平

脱落

「ほら千歳、ライバルに負けてられんで」

と、金太郎に無理やりのまされる千歳、哀れである

「やれやれ情けないばいね、自分にリミッターばかけとる時点で俺は、己の限界点ば決めちよったんかもしれんばい」

と、おなじみの台詞で去っていく

四天宝寺中

千歳千里

脱落

「飲め岳人、案外抗体が出来てるかもしれねえぞ」

「抗体で病原菌じゃねえから、つか、今千歳が……」

「飲ませる樺地」

「ウス」

「え、ちよつと待て、ぎゃあああああああ！」

そして樺地に取り押さえられ無理やりのまされた向日、もしかしたら彼が一番哀れかもしれない

氷帝学園

向日岳人

脱落

各自肉を焼き始めた

「相変わらず白石のやつ無駄のない焼き方や、そして、脱落者のいない青学がちょいリードやな、てか樺地のやつその場やないとコピ―できんのかい」

集計とりつつも実況する忍足

「んゝおいしい、お兄ちゃんもかわいそうね、こんなおいしいお肉食べられないなんて」

「今度、俺らだけで来ような」

気楽にお肉をほおばる杏に対し他の不動峰勢は沈んでいた

「でも乾さんの野菜汁ってそんなにすごいのかな？次飲んでみようかな」

「杏ちゃん、やめといった方が」

「平気平気、みんなも食べなよ、おいしいよこれ、ほら、焦げちゃうから」

怖いもの見たさに次飲むと宣言した杏

大丈夫か？

「おいこゝ、そういえばさ、次はやっぱり穴戸がのむの？」

「（なんでお前が知っている）ああ、やってやるぜ、これ以上犠牲が増えると氷帝の勝利はねえからな」

と、氷帝も飲む人が決まった

そして次のドリンクは
「もちろんペナル茶」

「はぁ、これもいけるね」

「ぎゃあああああ」

不二が飲み干す傍ら宍戸が走って行った

氷帝学園

宍戸亮

脱落

「じゃ、いったきまーす」

本当に飲もうとしている杏

次々飲み干していく

「ああ！杏ちゃん」

すべて飲み干すころにはピクリとも動かない、が、もちなおした

「だ、大丈夫？」

「大丈夫大丈夫」

しかし杏の顔色は心なしが蒼かった

「結構強がりだからね、あの子」

「いや、それで済む代物やないでこれ」

「ユウジのやつまた自分が消えよった」

「ええ加減味覚の物まねは無理って気付けや」

四天宝寺中

一氏ユウジ

脱落

「うわ、真っ赤ぜよ」

立海の面々はあまりのペナル茶の色に引き気味だ

「しかしこれを飲まないと次へ進めないぞ」

「大丈夫、きっちり飲むぜ………赤也が」

「俺っすか？」

ブン太に押し付けられた切原

「おなじ赤だしな」

「あんた潰すよ」

くだらない理由で一気に赤目モードに突入した切原

「まずい！切原の目が！」

「きちんと飲めよ、このわかめ野郎」

仁王がさらに追い打ちをかけた

「ひやははははは！てめえも赤く染めてやろうか！」

出た悪魔化

「このドリンクも赤く染めてやらあ！」

「いやもともと赤じゃん」

悪魔化した切原の言動に冷静に突っ込む越前

そして切原がペナル茶を飲んだ

立海大

切原赤也

脱落

「不動峰が他の三校引き離し始めたな」

集計を取りながらつぶやく忍足

「ペナルティーで一人脱落しなかったからね、でも次はすごいよ？」
「？」

こうして30皿目に突入した各校

「よし、このままがんばろうね、杏ちゃん」

そう言って神尾が彼女の肩をたたいたところ、彼女は倒れた

「え……………」

我慢の限界だったようだ、彼女の顔は蒼白だった

「杏ちゃああああああああああん！」

不動峰中

橘杏

脱落

「さて、次のドリンクはこれや、青酢」

そう言って各校にあれが配られた、そう、ここからが混沌の始まりである

「悪いけど、ぼくは同じ相手に二度負けたりしない」

そう言って不二は青酢を飲み干すが

やっぱり倒れてしまう

「不二iiiiiiiiiiiiiiii！」

「まったくやになっちゃうよね、なんでこんなもの飲まなくちゃいけないんだろう、スルーしちゃだめかな、橘さんもよくこんなの飲む気に」

「……じゃあお前飲め」……

青学

不二周佑

不動峰中

伊武深司

脱落

「さて、では俺がのませてもらうぞ、俺は貞治のドリンク平気だからな、昔よく飲まされた」

「じゃあ最初から柳がのめばよかったぜよ」

「そう思ったのだが次々決まるのでな、では」

「柳いいいい！」

立海大

柳連二

脱落

「うおおあ！」

「どうせてめえほとんど食ってなかったろ、寝てて」

氷帝学園

芥川滋郎

脱落

「続いてのドリンクはイワシ水」

「なんかうまそうな名前っすね」

氷帝学園

日吉若

脱落

「俺は青酢がだめでもいわし水は平気なんだ」

「青酢でリタイアすればよかったのに（ボソ）」

「イリユージョン」

「お、仁王も味覚の物まねで対抗かい？」

立海大

仁王雅治

脱落

「ここでめだつて（ry」

不動峰中

内村京介

脱落

「あーん、エクスタシー」

四天宝寺中

白石蔵之助

脱落

「続いては甲羅」

「ほおおお」

青学

越前リョーマ

脱落

「またか」

「で、今度は石田兄弟が元気になってるで」

ボディビルのポーズをとりながら齒を光らせる波動球兄弟

「まだ元気なやつおるし」

「ウス」

「続いては……………」

と、次々ドリンクを飲み増えていく屍たち
最終的には

「誰もおらんやんけ」

最後に与えられたドリンクを飲んで全員が脱落するという事態とな
った

「結局このドリンクなんやったん屋、ものっそい煙出てるけど」

「そ……………それは」

真っ蒼な顔をしながら乾が現れた

「すべての乾汁を合成した……………究極乾汁X……………だ」

「なんやねんそれ」

「じゃあ飲んでみてよ忍足」

「え？ちよつと待てや、ぐあああ！」

最後に忍足の屍が一番上に乗っかり終了となった

「う・ら・め・し・や……………」

最期にそう言って再び倒れた者がいたとか

本編（後書き）

はい、最期の台詞が誰のものは皆さんの想像にお任せします
いやー、ここまで暴走状態だと書いてるとき楽しいです
結局誰が一番哀れだったんですかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7200n/>

焼肉の王子様再び

2010年11月3日15時50分発行